

ハイデルベルク信仰問答講解説教36「神よりも賢くなろうとするのか」(2012年5月13日 礼拝説教)

【聖書箇所】

蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。(創世記3:4-7)

ところで、信じたことのない方を、どうして呼び求められよう。聞いたことのない方を、どうして信じられよう。また、宣べ伝える人がなければ、どうして聞くことができよう。遣わされないで、どうして宣べ伝えることができよう。「良い知らせを伝える者の足は、なんと美しいことか」と書いてあるとおりです。しかし、すべての人が福音に従ったわけではありません。イザヤは、「主よ、だれがわたしたちから聞いたことを信じましたか」と言っています。実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。(ローマ10:14-17)

【説教】

今日は、ハイデルベルク信仰問答第35主日、問96-98、十戒の第二戒のところを読んでまいります。まず第二戒の戒めはこうです。出エジプト記20:4-6を読みましょう。

先週は、第一戒を読みました。「わたしをおいてほかに神があつてはならない」真の神さまのみを神さまとするということ。他の神を拝むこと、そういう偶像礼拝はもちろん禁じられますが、それだけではありません。魔術的なこと、迷信、わたしたちの周りには常にそういうもので溢れております。それらを頼り信じること。また先週の説教でも触れましたが、難しいのは、一見、信仰的に思われること、例えばわたしたちの礼拝の行為や地上の教会のあり方ですら、それを絶対化する時に、それは偶像となります。つまりそれらが神さまと置き換えられ、あるいは神さまと並べられること。それが偶像礼拝ということですから。そしてその最たるものは、やはり自分を神とすること。自分に頼り、自分を中心に据えて、そこからしか物事を見ることができない。御言葉ではなく、自分の思いが先行する。神さまが脇へ追いやられている状態。そこに第一戒が問題にしている罪があります。単に他の神を拝むことだけではないのです。

さて、第二戒は「像を造ってはならない」という戒めです。これは第一戒の「他に神があつてはならない」とどう違うのか。像を造るということは、他の神を造ることであり、これもまた偶像礼拝なのではないか、そのように考えることもあろうかと思ひます。第一戒と第二戒はもちろん関係するところもありますが、しかし明確に区別する必要もあると思ひます。つまり第一戒は真の神さまではないものに頼り、それを神とすることが問題であったのに対して、第二戒は、真の神さまに対する礼拝の仕方が問題になっていると捉えることができます。その点を問96は明らかにしています。

ここではまず「神を形作ること」が禁止されています。神さまの像を造ること。問97では「神は決して模造されえないし、またされるべきでもありません」とあります。そうです、真の神さまは、本来、人間が形にして表すことなどできない存在なのです。永遠でありすべてを超越しておられるお方です。しかし、わたしたちはその神さまを形にしようとする。そういう誘惑が働くのです。それはどういうことなのでしょう。

そのような神さまを形にする、その典型的な例があります。出エジプト記の第32章に金の子牛の話があります。モーセが十戒を受けるためにシナイ山に登っていきました。しかしなかなか降りてこない。不安になったイスラエルの民は金の子牛を造ってそれを拝み出したという話です。その時に、その金の子牛を見たイスラエルの民は「これこそあなたをエジプトの国から導き上った神だ」と叫びました。大祭司アロンは、祭壇を築

き、「明日、主の祭を行う」と宣言し、そして次の朝、焼き尽くす献げ物、和解の献げ物をその金の子牛に供えました。礼拝をしたということです。

注意していただきたいのは、彼らは、金の子牛という別の新しい神を求め、それを礼拝したわけではありません。「エジプトの国から導き上った」とあるように、イスラエルをエジプトから救い出された神さまを礼拝しようとしている。それはもちろん金の子牛でも何でもありません。天地万物を造られた真の神さまです。その神さまを金の子牛に見立てて礼拝しているのです。そこに重大な問題があります。

どうして神さまを金の子牛にしたのでしょうか。金は富、豊かさの象徴と捉えることができます。また子牛は、古代中近東の国々において神の力を表すものとして用いられています。若くて強い雄牛は力と多産、繁栄の象徴であります。そのような牛の上にバアル神が立つバアル信仰の像がパレスチナの地方では多く出土しています。エジプトにおいてもそういう動物の像が造られ拜まれることがなされていたでしょう。イスラエルの民はそういう影響を受けていました。

彼らは、自分たちのイメージの中で、こういう富や繁栄、力の神さまを期待していた。彼らの描いている神さまのイメージこそまさに金の子牛だったので。つまり神さまの像を造るというのは、自分に都合のよい、自分の期待する神さまを造り上げるということ。実際に像を造らなくてもいいのです。自分の中の神さまに対するイメージを固定化していく。勝手に神さまはこういうお方であると思ひ描くこと。それも神の像を造ることなのです。

ともするとわたしたちは何でも自分が基準になり、その自分の「こうあるべき」という型に当てはめようとしているのではないのでしょうか。いみじくも金の子牛は鑄像であります。型を作り、そこに金を流し込むものです。予めあるその型にはめ込む。わたしたちはそのように神さまを自分の型にはめ込もうとしているのです。神さまも教会も何か自分の思い描いている理想のものが、それに当てはめようとする。そこに収まらないとそれは神さまではない、教会ではないと批判する。しかし神さまがどうしてこの自分という狭い価値観や世界観の中に収まりきるのでしょうか。それは冷静になって考えれば愚かなことではありますが、しかしそれが分からなくなるのです。

さて、もう少し像を造るということから見えてくるわたしたちの問題を考えてみましょう。問97を読みましょう。「所有する」ということが言われます。神さまを所有する。手中におさめることができる。それは神さまをある意味身近に置こうとすることです。イスラエルを導き出した神さまは姿が見えませんが、いつもモーセを通してその言葉を聞きました。金の子牛を造つ

たとき、モーセはなかなか山から下りてこない。彼らは不安になりました。神さまはいるのか。ですから手で触れることができる確かなものを求めたのです。姿が見えない言葉だけの神さまだと頼りなく、確かさを感じられなくなる。目で見て、手で触れることができる。それは分かりやすいし、確かに近くにあるように感じるのです。

同じ出エジプト記の3章にモーセの召命の話があります。燃える柴の間から神さまが語りかける。モーセはその光景を見ようと柴の木に近づこうとします。すると声が聞こえる。「近づいてはいけない」わたしたちが神さまを身近に感じたいと、何か手で触れたり、所有したりすることを神さまは禁じておられる。そういう形でわたしたちが近づくことはできない。これは創造者と被造物の境界、超えてはならない限界であります。しかしわたしたちはこれを超えようとするのです。創造者と被造物の境界がぼやけてくる。そこに人間の罪の根があります。

今日は、創世記の墮罪物語のところを読みました。蛇の誘惑は明確です。それは神さまのようになる。神さまのように善悪を知るものとなるということでした。つまり自分が神さまのように善悪の基準となること。善悪の判断を自分がくだす。それは神さまの知恵であり、賢さを求めたということです。「賢くなるように唆していた」とあります。その誘惑に負けたのです。そこで人間は超えてはならない創造者と被造物の境界を超えようとしたのです。

今日の信仰問答で問98に「わたしたちは神より賢くなろうとすべきではありません」とあります。ここに人間の罪の核心部分があります。神さまと人間との境界がぼやけ、神さまよりも賢くなろうとする。神さまの像を造るというのは、結局、神さまを自分の手の中で、自分の思い通りに動かそうとすることです。神さまよりも自分が上なのです。世にあるあらゆるご利益宗教はそのようなものでしょう。自分の願いが絶えず優先され、願いが聞かれないと、また別の神に向かう。それは一見信仰深そうに見えるかもしれませんが、神さまを信じているのではない。自分の都合よい神さまを求めている。それは自分が神になっているということです。わたしたちもともするとそういう誘惑に負けてしまうのです。神さまを自分の中で都合のよい神さまに仕立て上げようとしているのです。

しかしそのような偶像化は、生きて語りかけるお方である神さまを死んだ存在にしてしまいます。まさに物言わぬ偶像にしてしまう。これは皮肉としか言いようがありません。神さまを近くに置きたい。その存在に触れたいと願うばかり、逆に生きた神さまが離れていくのです。物言わぬ神にしてしまう。ただ人間としてはそのほうが都合がよいということもあるのです。いちいち口出しされては面倒、黙って言うことを聞いてくれる神さまの方がよい。そうなると偶像の方が都合がよいのです。そのように神さまを物言わぬ偶像に仕立て上げ、都合のよい時に引き出してくる。それでは神さまは召使いのようです。でもわたしたちは無意識の内にもそのように神さまをあしらってしまうのです。

最後に問98に注目していただきたい。ここにも一つの誘惑があります。画像、絵くらいならば、信徒が読んでためになるのでは。なるほど、そういうものが分かりやすい。特に子どもにはそういう視聴覚的な教材があると福音が伝わりやすいと考える。しかしそれは間違いなのです。いくらやさしい顔をした主イエスの像を描いたところで、それを見た人が主イエスの福音に触れることができるか。それよりも御言葉が語られることが大事なのであります。生きた神さまの言葉、説教が語られること。そこでこそ信仰は生きて立ち上がってくるのです。神さまは物言わぬ偶像ではなく、御言葉を通して、常にわたしたちに語りかけてくださるお方だからです。ローマ10:17「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによりて始まる」その通りであります。

その姿勢を大切にしたいのが、プロテスタントその中でも改革派の教会です。わたしたちの礼拝堂は非常にシンプルです。こ

れは御言葉に集中するためと齊藤先生から教えられました。お花も飾らないのです。わたしたちを生かすのはただ神さまの生きた言葉だけなのです。

主イエスはまさに命の御言葉としてこの罪の世にいられました。この方が神さまを現された。わたしたちは近づけません、神さまの方からイエス・キリストを通して、わたしたちに深く関わってくださるのです。それはわたしたちの偶像、その頑な罪をあの手で十字架において砕いてくださった。そしてよみがえりの命をもって、わたしたちを新たに生かしてくださいます。そこでこそわたしたちは正しく神さまを礼拝することができます。わたしたちの信仰が死んだものにならないように、常に生きた御言葉を求めましょう。お祈りいたします。